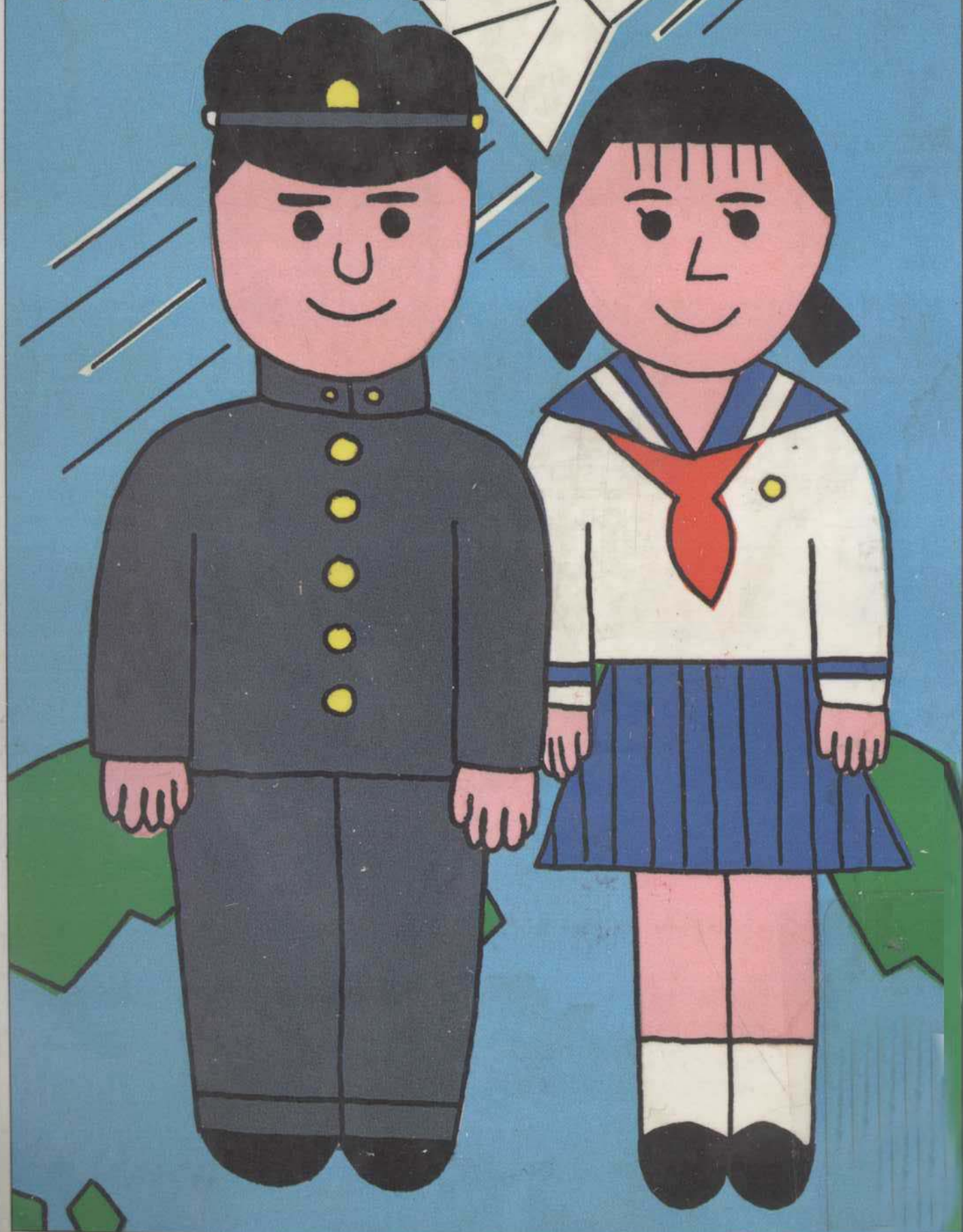


岩波ジュニア新書 84

21世紀を生きる 君たちへ

日本の明日を考える

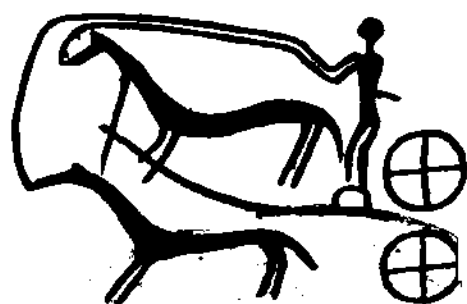
小山内美江子著



21世紀を生きる君たちへ

—— 日本を明日を考える ——

小山内美江子著



岩波ジュニア新書 84

21 世紀を生きる君たちへ

岩波ジュニア新書 84

1984 年 10 月 22 日 第 1 刷発行 ©

定価 530 円

著 者 お 小 さ ない み え こ
山 内 美 江 子

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目 次



I	東南アジアと私	1
---	---------	---

テレビドラマを通して(2) 不幸な過去の歴史(5) 戦時下の青春(8)
過ちをくり返さないために(16)

II	シンガポールの子どもたち	19
----	--------------	----

美しい光景(20) シンガポールを舞台に(23) 日本人学校の悩み(26)
シンガポールの受験戦争(31) 笑顔のシンガポールっ子たち(36)

III	豊かさと貧しさ	41
-----	---------	----

——シンガポールの日本人——

カラン工業団地で(42) ルック・イースト政策(47) 痛烈な日本人批判
(50) 国際感覚とは(53) 無邪気な観光客(55) 心ない子どもたち(60)
豊かさの力(69)

IV	シンガポール人の心	71
----	-----------	----

庶民の暮らし(72) T氏の胸のうち(75) 日本女性のけなげな努力(77)
平和を訴えるUさん(82) 美しい風景の裏に(85)

V	侵略の傷跡にふれて……………	87
---	----------------	----

白い柱は語る(88) セントーサ島の悲劇(91) 過去を生かす道(94) 占領下の圧政(98) 憎しみを押さえて(100)

VI	戦中戦後の青春……………	101
----	--------------	-----

歴史を学ぶ意味(102) 墨ぬりの教科書(104) おそろしい神風(107) 眞実を知らされぬまま(110) 日本が負けた日(111) 生きている実感(114) アメリカ兵がやってきた(116) 神の国の腐敗(118) 平和国家への歩み(120) 国を守るためには(122)

VII	いま学んでほしいこと……………	125
-----	-----------------	-----

——学校・家庭の場で——

受験戦争の構図(126) 自分を発見する場(129) 子どもの特性(131) 生きる力(133) 話し合える雰囲気(137) 親子のルールづくり(145)

VIII	困ったときの友……………	149
------	--------------	-----

——マラッカに向かうバスの旅——

ふたたびシンガポールへ(150) 幻の作家を追って(153) 路線バスにまぎ

れこむ(155) はてしない緑をぬって(157) 突然バスがとまる(160) どな
り出す日本人(163) 思いがけない体験(166) 一路マラッカへ(168)

IX 君たちが築く明日の世界 173

隣人に学ぶ(174) 歴史を読む(178) 戦争という浪費(181) 日本の役割
(184) 死の灰はどこへ(186) 金八先生は訴える(188)

あとがき 191

カットⅡ安西水丸

I 東南アジアと私



まず、海外の話、それも東南アジアの話から始めましょう。

テレビドラマ
を通して

それというのも、いま私の書斎の、机のすぐ脇の、手をのばせばどの本でもとれる本棚に、東南アジア関係の本と資料がずらりと並んでいるからです。

テレビのドラマづくりのためのものですが、もう数カ月前から東南アジアの勉強をしていて、間もなく脚本化の作業に入るので、シナリオライターである私が現在もっとも関心をもっている問題が東南アジアなのです。といっても、たかだか数カ月の勉強では、みなさんに東南アジアを語る、というのは少し冒険だと思えます。だから、一人のシナリオライターが、どうして東南アジアを舞台にドラマを書こうとし、また、どうやってドラマ化していくものなのか、私の話で、みなさんにも私といっしょにドラマ化の疑似^{ぎじ}体験をしてもらえたらどうだろう……と、そんなふうに考えてみました。

ふつう、シナリオライターというのは、フリーランサーといって、特定のテレビ局や映画会社に所属しているものではありません。ある日、作品の執筆依頼がまいこみます。今

I 東南アジアと私

度の仕事の依頼があったのは、一年半ほど前のことでした。スケジュールを検討した結果、その頃にはかなり取材に時間をかけられそうな見通しがあったので、私は積極的にこの仕事を引き受けました。

理由は二つありました。その一つは、私のお友だちの娘さんが結婚し、その新婚旅行先が東南アジアであったこと、もう一つは、その東南アジアに私は一度も行ったことがない、いいえ、どうしても行く気になれなかったことにあります。

昭和二十年八月十五日、十五年戦争と呼ばれた、旧日本軍の中国大陸侵略からはじまった戦争が終わったその日、女学校の三年生であった私。その私にとって、東南アジアの国々は、かつての戦場であったという思いからぬけきることができなかったからです。

お知り合いの新婚旅行と戦争。とても奇妙なとり合わせだと思うでしょうが、私自身のなかでも、とても変なからみ方をしていて、今度のドラマのなかでは私自身のために、これをときほぐさなければいけない、とそう考えました。

ドラマはまず、資料を読むことと平行したシナリオハンティングから始まります。東南

アジアのドラマを書くには、どうしても東南アジアに行かなければなりません。

それまでは、タイ、カンボジア、シンガポール、それらの旅行にも「日本語が通じるのだから大丈夫よ」と、語学力のない私を安心させるように誘ってくださる人がいても、私は、いつも「ノー」と言いつけてきました。

もちろん横文字に弱いということもあります。私の女学校時代、英語は敵性語と言われ、かならずしもこの学科は勉強しなくてもよいとまで言われたのです。

野球の「ストライク」は「ヨシ」、「アウト」は「ダメ」、敵性語追放のために、珍妙な行政指導が行なわれたのもこの頃のことです。そうになると、あまり勉強好きでなかった私などは、一学科でも苦労しないですむとなれば、もう、両手をあげてバンザイを叫んだものです。そのおかげで……、今になって外国語にはとても不自由をしています。

それでも横浜生まれのためか、子どものころから街で外人さんを見かけても別にめずらしくも思わずに育ったのと、大人になってから生活のため、外国語は度胸だ！とばかり、単語の羅列とジェスチュアで、むずかしい業務以外は、これまでなんとか無事に切り抜け

てきましたが、こうしたことと南の島を避ける気持ちとは、私のなかではっきりと結ばれているのです。

不幸な過
去の歴史

ここ数年、不況とはいっても、日本人の海外旅行者の数は増えつづけています。ハワイ、グアム、サイパン、香港^{ホンコン}など、費用の手軽さもあって大人気のようにです。成田空港で見かける若者たちは、じつに身軽な服装で、私がはじめてアメリカに行ったときのような、悲愴^{ひそう}感をただよわせた見送りの家族の顔などは、もうどこにも見あたりません。

若者たちが身軽にどんどんと海外へ出て行く。そのこと自体、私は大いに賛成ですし、そうあってほしいと願ってきました。でも、遊びに行くとき、その国とこの日本との関係を若者たちがどれほど理解しているのかと考えると、とても不安です。

若者だけでなく、あるホテルの食堂で、酔っぱらったオジさんが、日本語でボーイさんにいろいろ言いつけたあげく、

「このホテルは、どうして日本語のできるヤツを置いておかないんだッ！」

とわめいている姿を見たことがあります。

ボーイさんというのは一つの職業です。そのオジさんもきっと日本でなにかの仕事をしている人でしょう。一人の職業人が他の職業人にたいして、ヤツという呼び方をしてよいものでしょうか。もし自分がそう言われたらどんな気持ちができるでしょうか。

酔っぱらいへのお説教は、からまれたりすることがあつて、とてもむずかしいものです。私はフロントへ行き、日本語のできるホテルマンがいるかどうかを聞くと、あのオジさんのお連れの人に連絡してやってくださいと頼んで自分の部屋へ引きあげました。

海外に出ると、一人一人が外交官である、とよくいわれます。日本では、酒のうえのことでだから、といって許されることもありますが、このホテル関係の人にあのオジさんが日本の評判をまた一つ、落としたことはまちがいありません。

だからといって、せっかく自分のお金で遊びにいつているのですから、手のあげおろしまで人目を気にしていたら、それこそ肩がこつて、いったい何のために行ったのかわからなくなります。そうならないためには、していいことと悪いことの区別を、日常生活のな

I 東南アジアと私

かでも、はつきりと身につけておくことが大切なのではないでしょうか。

それにしても私の心は痛みました。その国は、かつて、日本軍が侵攻し、日本人とアメリカ人だけでなく、その国で暮らしていた人々をもまき込んで、多くの血が流れたところなのです。その戦争で肉親を失った人たちがいまもそのまま暮らしているのです。金をはらえば客だとはかりにヤツ呼ばわりしてよいものではありません。

若い人たちにとって、戦争とは、まだ生まれる前のでき事です。私の年代は、不幸にしてその戦争をよく知っているのです。それだけに、多くの血が流れた南の島へ気軽に遊びに行く気には、どうしてもなれなかったのです。

私がグアム島へはじめて行ったのは昭和五十八年の二月のことです。グアムは、正確には、アメリカ合衆国の一部です。もし私が、日本とアメリカと現地の人たちが戦争で血を流したところに行くとしたら、まずグアム島へ、そして以前、満州といていた中国の東北地方へ行ってみたいと思いました。そこで私の親しい二人の従兄いとこが戦死しているからです。

グアムで戦死した従兄は十九歳になったばかり、満州で死んだのは彼の兄で二十三、どちらもこれからという若さでしたが、弟のほうがさきに戦死しています。

はじめて行ったグアムは、日本が冬のまっ最中だというのに、色とりどりの花が咲き乱れ、初対面ながら訪ねていった人から親切にしてくださき、ほんとうにすばらしい所でした。まっ青な海は、早くおいでおいでと言うように波を打ち寄せてきて、一刻も早くザブンととび込みたい誘惑にかられましたが、持っていたお線香と日本酒を、死んだ従兄や若いアメリカ兵、そしてグアムの人たちに捧げるほうが先決です。

こうしたことは、あるいはひとりよがりの行事と思われるかもしれませんが、でも、海外に行く場合、その国と日本との過去のかかわりあいをよく知って行かなければ、決してほんとうの友好的な関係は生まれないし、日本人として平和への一歩前進もないのではないのでしょうか。

戦時下の 青春

東南アジアと脚本作りの話から少しありますが、私の息子が中学生であったころ、ある出版社から「初恋について」という随筆を依頼されたことがあります。

I 東南アジアと私

当時は、女だてらにアクション物の脚本などを手がけていましたから、何かのおまちがえではありませんかと問い返した覚えがあります。ともあれ、そのときの随筆を紹介しましょう。タイトルは「ズレた初恋」です。

「どれが初恋だったのだろ……、などと書き出すと、いかにも恋多き女のようにカッコ良いのだが、やっぱりあれ以外にはない。そう三十数年前の昔を思い返すと、私の場合、とても変な、としか言いようのない初恋だった。

異性にたいして、はじめて胸をときめかし、物も喉のどを通らない思いをするのが初恋であると定義したとき、私はたいへん不幸な家庭環境に育ってしまった。

つまり、家の中に男性が多すぎたのである。父親はもちろん男、兄と弟もすべて男、そのうえわが家には小僧こぞうさん、若い衆わかしゅう、職人さんと、男くさい連中がおおぜい働いていて、ちょっとやそこらでは、上半身を裸にしている異性など見てもドキつかない娘になったあげく、はやばやと古めかしくも、イイナズケというものが決められていた。初恋は、結局その彼への片想いかたおもで終わったのだが、デートの記憶は私の小学五年生

のときに始まる。相手は九歳も年上で当時の高等学校のバンカラ、母方の従兄いとこで九州男子である。

大きくなったらこの人のお嫁よめさんになるんだと、かくべつの感激もなく、お酒を飲むと賑にぎやかな彼を、ある日、横浜の港に案内した。雨が降ってきて、ツリガネマントの中に入れてもらった記憶があるからたぶん冬休みだったのだろう。

夕方ですら寒く、早く帰りたいと駄々をこねる私に、お人形さんを買ってやるからと、彼はやや悲しげな目で私をなだめ、ふたたび私の堪忍袋かんにんぶくろの緒おが切れるまで、外国船の出入りする灰色の海の向こうを見ていた。

彼は、鼻タレ娘の未来のヨメさんに気兼ねしながら、そこへ立ち尽して何を思っていたのだろうか……。太平洋戦争の始まりを翌年に控えた年のことである。

戦争なんかで死にたくないと言い、軍国少女であった私は非国民だと眉まゆをあげて怒ったが、彼はすでに逃れられない運命を予知していたのだろう。やがて召集され、満州へ派遣はけんされれば死なずにすむと言っていた満州で、敗戦後、一週間目にソ連軍と闘